

研究ノート

トロント日系コミュニティにおける エスニック文化継承： 「池端ナーサリー」の位置づけ

嘉納もも 嘉本伊都子

要 旨

カナダにおける日系コミュニティの研究は、二十世紀初頭に移住してきた人々とその子孫たちを対象にしたものが大多数である。しかしながら1967年の移民法改正以降、少数ではあるが毎年日本からの移住者がカナダに入国しており、21世紀において彼ら「新移住者」の存在を研究対象とすることは日系コミュニティの実態を理解するのに不可欠であると考えられる。本研究は、カナダ最大の都市トロントに在住する日本人新移住者家庭に焦点を当て、多民族・多文化社会であるカナダという環境の中で、彼らがいかにして日本文化の継承に取り組んでいるのか、その問題点と成果について調査する事を目的としている。本稿ではその一環として2004年12月に聞き取り調査を行なった「池端ナーサリー」でのデータを記述報告し、日本文化継承におけるこの園の役割について考察する。

キーワード：日系カナダ人コミュニティ、エスニック文化継承、新移住者

I. 本研究の背景

1 カナダの日系コミュニティ研究

カナダにおける日系コミュニティの研究は、二十世紀初頭に移住してきた人々とその子孫たちを対象にしたものが大多数である。これは英語で出版されたもの、日本語で出版されたものの両方を検索した結果について言えることであるが、その理由としてはこのグループがたどってきたあまりにも劇的な移民の歴史が挙げられよう。

第二次世界大戦前、ブリティッシュ・コロンビア州に集住した中国人や日本人などアジア

系移民の経済的成功は、原住民であると自負するヨーロッパ系カナダ人によって脅威と見なされ、そのために「黄禍論」が唱えられたことは良く知られている。中国からアメリカ合衆国への新たな移民はすでに1880年代より禁止されていたが¹⁾、それに次いで「紳士協定」が1908年に日加両政府の間で結ばれ、日本からカナダへの移民も著しく制限されることとなる。真珠湾攻撃によって太平洋戦争が勃発すると、日系人は敵性外国人であるという理由から西海岸地域を立ち退かされ、内

1) カナダへの中国人移民の制限はそれより遅れて1928年より実施された。

地に強制収容された。そしてカナダ生まれの二世たちは、カナダへの忠誠を証明するため最も危険な前線へと志願して徴兵に参加した。

終戦後、カナダ政府の徹底的な分散政策により、日系人の多くは戦前の居住地であったバンクーバー地域に戻ることを許されなかった (Makabe, 1998)。目立たないよう、カナダ社会に同化することに自ら努めた日系人たちは、今日にいたるまで二度と「日本人街」を形成することなく、4世代目以降においては、1980年代後半までに外婚率（つまり日系人以外のエスニック集団の成員との婚姻率）が95%に上るという事態を招いている (Kobayashi, 1989)。ところが1980年後半にはその若手世代の協力を得て、第二次世界大戦中の不当な扱いに対する謝罪を求める「リドレス運動」が日系人によって起こされ、カナダ政府を相手に回して歴史的な補償を勝ち取った。

このような一連の経緯から、戦前からの日系人グループはゴードンの同化理論 (Gordon, 1964) やハンセンの世代間継承理論 (Hansen, 1937) などを検証する際、格好の対象として見なされる。しかしながら1967年の移民法改正以降、少数ではあるが毎年日本からの移住者がカナダに入国しており、40年経った21世紀において彼ら「新移住者」の存在を研究対象とすることは日系コミュニティの実態を理解するのに不可欠であると考えられる。

平成16年度京都女子大学研究経費助成を受け、嘉納もも・嘉本伊都子が進めた共同研究は、カナダ最大の都市トロントに在住する日本人新移住者（以降：新移住者）家庭に焦点を当て、多民族・多文化社会であるカナダという環境の中で、彼らがいかにして日本文化

の継承に取り組んでいるのか、その問題点と成果について調査する事を目的とした。本稿ではその一環として聞き取り調査を行なった「池端ナーサリー」でのデータを記述報告し、今後の研究を方向づけるための考察点を記すこととする。

2 日系コミュニティにおける「池端ナーサリー」の位置づけ

本研究の先行調査として位置づけられる嘉納 (2003) の「多文化家庭におけるエスニック文化の継承」では、トロント在住の新移住者にとって土曜日に開校される「日本語学校」が次世代のエスニック社会化において重要な役割を担っていることが見られた。エスニック文化の継承は家庭内でのみ行うことが長期的には難しく、子供たちにとって普段はカナダ社会で「マイノリティ文化」として位置づけられる日本文化が「マジョリティ文化」として機能する場を体験できる「カエデ学院」(仮称) が新移住者たちの継承活動の中心となっている様子がこの調査から明らかになった。

さて、本論で紹介する「池端ナーサリー」は幼少期における日本文化継承を目的とする施設であるが、前述のカエデ学院とは異なっており、カナダ政府の「ヘリテージ言語プログラム」などエスニック集団向けの制度に則っているわけではなく、全くの私立事業である。以下に詳しく記述するように、このナーサリーは池端友佳利園長が日本で得た看護師の資格を生かして始めた託児サービスが年々、発展して今の形態に至ったものである。その意味では元からエスニック文化継承を主旨としていたわけではなく、池端園長自身が日本

語でそのようなサービスを受けられなかったという、ごく個人的な経験から始まったと言った方が正しい。

しかしながら、現在、このナーサリーは日系文化会館 (Japanese Canadian Cultural Center) の建物の一角にあり、通常ならそこに足を運ばない人々を呼び寄せるといふ、日系コミュニティを形成する様々なメンバーの「マグネット」(磁石) 的な役割を果たしている点が興味深い。

冒頭でも述べたとおり、1988年にはカナダ政府を相手取ったりドレス運動が日系カナダ人の勝利で終わったわけであるが、日系文化会館はカナダ政府が支払った補償金の一部を受けて(元あった場所からはそう遠くないが) 現在のガラモンド・コートに移転した。会館はカナダにおける日系人の歴史を伝える資料館として機能するとともに、日本文化をカナダ市民に広く知ってもらうための様々な講座を設け、また「日系ボイス」など日系メディアが事務所を構える場所にもなっている²⁾。したがってこの日系文化会館は、日系コミュニティにおいて、先述のハンセンが唱えた「エスニシティの再発見」の本拠地としての役割を期待されたのであった。

さて、ここまでの議論において「日系コミュニティ」と称している集団は、実際はそう簡単にひとくくりにはできないことを記しておく必要がある。殊に、リドレス運動の当事者である戦前からの日系カナダ人と、1967年以降の移民法改正後にカナダに渡ってきた新

移住者の間には決して小さくはない「隔たり」が存在する。それはカナダにおける戦争体験を共有しているかどうかに関るところが大きいのだが、両者の距離を埋めるための試みが何度となく催されていることは、日系アイデンティティの存続に日系人自身が危機感を持っている証拠だろう³⁾。

一方、日系文化会館の立地する場所は、トロント市内から決してアクセスが良いとは言えず、車以外で行く場合は地下鉄のエグリントン駅からバスに15分ほど乗ることになる。周りは北米の郊外に多く見られる“industrial complexes”(平屋の企業ビル街) であり、何かのついでに寄ってみる、ということはしたがってほとんどあり得ないと言えよう。また、日本人駐在員などのいわゆる「長期滞在者」の多くはノースヨーク地区に固まって住んでいるものの、エスニック・タウンなどの明らかな集住地区を持たない新移住者は“Greater Toronto Area”と呼ばれるトロント近辺の地域に分散しており、日系文化会館には特に何かのイベントがある時以外はあまり訪れる機会がない。せっかくの施設がその可能性をフルに生かしていない、というのが現状であった。

ところが1999年に池端ナーサリーが開設されて以来、様々なバックグラウンドを持った人々がこの場所を知ることとなる。駐在員家庭、新移住者家庭、戦前からカナダに在住している家族などが池端ナーサリーのサービスを利用するために日系文化会館まで車を走ら

2) 日系文化会館ホームページ: <http://www.jccc.on.ca/> 参照

3) 例えば、2003年11月に全カナダ日系人協会 (NAJC) の催した「新生リーダーフォーラム」の報告書において、カナダの主要都市の日系コミュニティ代表者たちが最も火急な課題として再三挙げているのは「新移住者と日系カナダ人の統合」である (p. 22参照)。<http://www.najc.ca/najcsite/resources/PDFs/ELFReport.pdf> 2005年9月29日閲覧

せ、夏期にはナーサリーの名物となったサマー・キャンプに参加する。池端園長は、自分の設立した園が、いつの間にか、日系コミュニティの様々なグループ間の「かけはし」的な存在となったことを殊のほか嬉しく思っていると言う。

「池端ナーサリー」は、エスニック文化やエスニック・アイデンティティの継承、エス

ニック・コミュニティの存続が、必ずしもホスト社会側やコミュニティ側が意図的に作り上げた制度によってではなく、このような個人のささやかな（しかしエネルギーに溢れた）試みによって支えられる場合もある、ということを示す良い事例である。以下、池端ナーサリーにおける聞き取り調査の一部を紹介する。

Ⅱ. 池端ナーサリーの概要

カナダのトロントにある Ikebata Nursery School（以下、池端ナーサリーと表記）は、日系文化会館内にあり、その保育目標は「人間形成を培う大切な乳幼児期に日本とカナダ両国の文化・習慣・言葉を自然な形で子供達に習得してもらおう事、その中で子供達がその子らしさを生き活きと表現し、国際人として望ましい未来を作り出す力の基礎を培うお手伝い⁴⁾」である。

プログラムは年齢別になっており、「もも組」、「バナナ組」、「ぶどう組」、「メロン組」に分かれ、子どもたちがどのような言語環境で保育を受けたいかという親の要望にそって分かれている。年少組の「もも組」は、バイリンガルで保育が行なわれ、対象は18ヶ月から2歳前後のクラスである。「もも組」を経て、「バナナ組」か「メロン組」に分かれる。年中組の「バナナ組」は、日本語のみクラスで対象は2歳半から3歳半前後で、さらに日本語のみのクラスを希望する場合は、年長組のぶどう組があり、3歳半ぐらいから6歳前後までである。一方、「メロン組」は2歳半

から6歳前後対象で英語クラスである。卒園後はトロントの現地学校（英語）へ行くことにあるのが大半であるという。

通常保育の時間は午前8時45分から午後3時45分であるが、延長保育時間として3時45分から午後6時までが設定されている。子どもたちは毎日通園しているわけではなく、親の教育方針と経済事情を考えてクラスによっては週1回から5回まで選ぶことができる。もちろん延長保育を希望する場合は別途の支払いであり、延長保育の場合も週1回から5回まで選ぶことができる。

池端ナーサリーへ聞き取り調査に向かった2004年12月20日は、カナダでも40数年ぶりという寒波に見舞われ、予定していた鉄道での移動はポイントが故障し、いつ運転が再開されるかわからなかった。交通機関を麻痺させただけでなく、寒さに慣れているはずのカナディアンに、小さな子どもの外出は控えようと思わせるに十分な寒さであった。普段なら、ナーサリーの中で駆け回っていたら子どもたちの姿は、ほとんどなく、保護者へのイ

4) 池端ナーサリーHP内「保育方針」参照。http://www.ikebanursery.com/ 2005年9月29日閲覧

インタビューは断念せざるを得なかった。

インタビューは、園長（Principal）の池端友佳理先生（以下、池端さんと表記）、ディレクター（Director）の鶴崎圭子先生（以下、鶴崎さんと表記）、そしてナーサリーで保育士をしていらっしゃる2人の先生（Kさん、Tさんと表記）が、快く受けてくださった。本報告は、主に池端さんと鶴崎さんを中心に取り上げる。場所は池端ナーサリーが入っている日系文化会館の一角である。その日は寒波の影響で閑散としていたが、大きなテレビスクリーンに映し出されたNHKニュースをソファにゆったりかけて見ている日本人移住者と思われる男性がいた（後にこの方は会館内に事務所を構える「日系ボイス」紙の編集長であったことがわかった）。インタビューはそのテレビの近くのテーブルと椅子が置かれている広々とした開放的なスペースで行なった。日系文化会館と池端ナーサリーをつなぐ廊下は非常に複雑で、途中工事中の箇所もあり、日系文化会館入り口からは、そこにナーサリーが併設されているとは、わかりにくい構造になっていた⁵⁾。

インタビューに入る前に、池端園長自ら園内を紹介してくださった。その際、注意を受けたのは子どもの写真はとらないで欲しいということであった。近年、日本でも幼児の誘拐や、低学年児童を車にのせ暴行し殺害におよぶという事件が増えているが、カナダではその緊張感は日本の比ではない。日本でならデパートのおもちゃ売り場に子どもを残し、母親が買い物をしているあいだ自由にさせることができても、欧米ではその間に誘拐されかねない。

インタビューの最初には、被調査者の海外経験、結婚、出産のタイミングを把握するために用意したフェース・シートを配布し、被調査者自身に書き込んでいただいた。フェース・シートは被調査者が出生した0歳から現在に至るまでのプロセスを、「教育・キャリア」「海外経験」「結婚・出産」にわけ記入してもらった。どのタイミングで、どれくらいの期間海外経験があるかがわかり、また出産や結婚を日本国内で経験しているのか海外で経験しているかなど、基本的な情報を確認しやすい。

Ⅲ. ケース・スタディその1：池端ナーサリー園長 池端友佳理さん

池端友佳理さんは、日本で大学を卒業後、看護師ならびに助産婦として病院に勤務していた。その後、観光で1990年にカナダに来た。配偶者である日系3世のカナダ人男性と出会い、トロントで92年に長男を出産したのが20代半ばであった。13歳になる息子は中学生の途中まで毎週土曜日に日本語補習校に通って

いたが、現在は週6日アイス・ホッケーをしており、不本意ながら日本語補習校は断念せざるを得なかったという。

1 池端ナーサリー開園の経緯

日本で助産婦の経験のある池端さんは、自らの出産をきっかけに、出産に対する日本と

5) 前述の日系文化会館のホームページからは池端ナーサリーについての言及は見当たらない。

カナダの違いに驚いた。また、自らの職業を活かそうと、妊婦教室を開いたり、妊婦マッサージを提供し始めた。しかし、自分の子どもを預けようと日本語の環境のある保育園を探したところトロントにはそのような施設はないということが判明した。そこで、「小さな赤ちゃんが専門」であることからベビーシッターのような形で預かったところ、口コミで広がり、年齢層もあがるにつれ、日本語で自らも子どもも話せる環境がある空間の必要性を痛感した。カナダでは日本の託児所のような施設をホームディケアセンターというが、その認可を取得し、1993年に3歳から4歳まで預かることのできるように自宅を改造して開いた。

開設する前は、「少子化しているので採算にあわない」などと言われたそうだが、開設してみるとウェイティング・リストに名前があふれ、ノースヨーク、ドンミルズとヨークミルズを中心に4箇所までに施設が拡大した。ランチが増えるにつれ、目が行き届かないことを危惧し始めたころ、日系文化会館の移転の話が持ち上がり、「日本語と日本文化のその関係が続けるには最高の場所」である日系文化会館に池端ナーサリーを開設したのが、1999年であった。

日系文化会館に移ってからも、入園の希望は殺到しており、ウェイティング・リストには1年待ちの状態になっている。日本の保育園は、働く女性の子どもの優先される場合が多いが、池端ナーサリーはそのような選抜はなく、「早いもの勝ち」で、性別が分からなくても妊娠がわかれば、何年何月何日出産予定として、申し込みがあるのが現状である。さらにスペースを拡大したくても日系文化会

館の場所を借りることは、物理的に限界にきており、別の場所に新たにランチを開きたいという希望はあるが、まだ探している段階だそうである。

2 園児たちの家庭言語状況

自宅でベビーシッターをするホームディケアセンターを開設した1993年ごろは、日本語教育を目的にしている7割は日本人の駐在員夫婦であったが、現在、駐在員の割合と国際結婚の割合は逆転している。

池端ナーサリーでは一日に67人の子どもたちを受け入れることができる。だが、午前中だけの子どももいるので、一日の延べ人数としては120人ぐらいである。子どもたちの家庭内言語事情も、家で日本語を話す、あるいは全く話さない、国際結婚家庭のように、英語・日本語両方が家庭で話されるという様々な家庭内言語環境の子どもたちが池端ナーサリーに通う。その割合としては、家庭で完全に日本語を使う家庭は20%ぐらいではないかという。最も多いのは、国際結婚家庭で、およそ半数を占める。その内訳は約8割が、カナディアンの子供、日本人の母親という組み合わせである。その逆の組み合わせの家庭も皆無ではなく、特に父親が日本人の場合、日本語を伝える環境を維持することは難しく、継続して通うことも難しいのが現状である。文字どおり母語が日本語である母親の家庭のほうが「母国語」を伝え易く、平日家庭にいないことが多い父親が日本人の場合は、どうしても英語を母語とする母親の影響が強くなる。国際結婚カップルの増加とともに、そのようなカップルの子どもたちは、近年増加傾向にあるという。

国際結婚増加の要因について、「失望というか将来見出せない若者たちがこちらに来ること」という現象が、バブル崩壊後続いているのではと池端さんは語る。また、ワーキング・ホリデイを利用してきた日本人女性が、カナダで知り合った男性と結婚するというケースが多い。海外での国際結婚の増加ならびに、カナダへのワーキング・ホリデイ・ビザの発給については具体的に後ほど考察したい。

3 通園理由とエスニック文化継承

両親ともに日本人あるいは、国際結婚カップルのように配偶者のどちらかが日本人である場合の通園理由を考察する前に、日本人を含まない保護者の場合の通園理由は何であろうか。

日系人や、両親がカナダ人同士でも日本に滞在経験があり、日本的な教育の方法に理解を示す保護者もいる。カナダ人同士が両親の場合、このように熱心なカナダ人同士の親から、近所にあるからという理由で子どもを入園させる家庭、つまり、親の双方が日本人ではないというケースが20~30%という構成になっているようだ。カナダ人同士（日系を含む）の両親が望む日本的な教育とは、統一性のなかで、クラスで「こうしましょう」ということがあったら、先生の言うことを子どもたちが一つ一つきちんと進めていこうとする姿勢であるという。

日系人の親の中には、自分たちは日本語を

話すことはないが、日系としての「heritage（遺産）」⁶⁾を子どもたちに伝えたいという思いから、ナーサリーに通わせている人もいる。この場合、家庭では英語になるのであるが、両親が共働きの場合、一日の大半を、しかも月曜日から金曜日までナーサリーで過ごすために、家庭での英語を話す機会が少なく、池端さんらが「びっくりするほどきれいな日本語」で話すようになるそうだ。

池端ナーサリーのリーフレットに「カナダにいながらにして、日本の文化と習慣にのっとり、日本語での保育をしています。日本を自然に感じられる環境の中で、日本の習慣や文化への理解を深めます。生活の中で日本語への興味や関心を育て、喜んで話したり聞いたりする態度や豊かな言葉を養います」とあるように、単に日本語だけでなく、子どもたちに「自分がどこかで自分は日本の日本人なんだよ、ということを忘れてほしくないという願いがあると思う」と池端さんは語る。また、保護者の中には「将来の子どものためになると信じていらっしゃる方がすごくいらっしゃいます」という。具体的には日本に行って仕事をしたい場合、中途半端な日本語と英語よりも、完全なバイリンガルは非常に難しいとしても、日本語がきちんと話せるほうがプラスになると考えているそうである。

ナーサリーに通わせるために、ナイアガラのほうから子どもを預けにきていた保護者もいたという。結局はこの遠方からの通園は長く続かなかった。

6) ホーム・ページには、日系人の母親であると思われる<Letter from Mrs. Makimoto>が掲載されている(掲載文英語)。5年間のナーサリー生活で日英のバイリンガルに娘が育っていることに喜びを感じ、家では日本語の歌を口ずさみ、上達していく日本語を娘から学ぶこともあるという。家では娘にそのような言語文化の環境を与えることはできなかつたろうと述べている。そこでの先生は、ただ「教える」だけでなく、日本の遺産を、日本の魂とともに育み、子たちの心に注いでいると賞賛をしている。

10年前は、「近くにあって便利」という理由で預けられる保護者が多かったが、近年、「日本語を小さいうちから」という熱心で一生懸命な保護者が増えていると感じているようだ。日系のカップルも国際結婚カップルも同様の傾向にあるという。特に日本人配偶者がカナダで英語の習得で困った経験があり、二つの言葉を一度に習うことのできる我が子を「ラッキー」と積極的にとらえて、自分が困ったぶん、子どもにはそのような思いをさせないように、と日本語の教育に熱がこもっている人が多いという。また、情報がインターネットの普及により、子どもの言語教育についての情報が入手し易くなったという点もある。また、移住してきたからこそ「日本を大切に思う」という気持ちが強まったと池端さんご自身の体験も語られた。カナダの多文化主義的な教育環境も「日本人としての誇り」を持つことにポジティブな影響を保護者ならびに子どもたちにも与えているようだ。

4 夫婦間協力体制

保護者の母親は働く女性が多いのか、という質問に対して、興味深い答えが返ってきた。両親ともカナディアンの場合、共働きが多く、日本人女性の場合は、働いている人もいるが、働いていない母親のほうが多いという。しかし、「今までみたいに子どもが生まれたら、はい、専業主婦にっていう傾向が少なくなっていると思うんで、それもカナダでも同じで、カナダにいるその移住されてきた方々も、どんどんどんどん、あの……外に出て働こうという人も増えていきます」ということであった。

一方、カナダ社会で働く日本人男性のほう

にも変化が見られる。ナーサリーに到着したとき、日本人男性（日系かもしれない）が子どものお迎えに来ていたが、子どもの送り迎え、あるいは、産後の子どもの世話のために休暇がとれるなど「日本だったら絶対に彼はしていない」ことをあたりまえのようにするようになった例もある。配偶者がカナダ人であれ、日本人であれ、日本語のあるいは日本文化の継承のために決して安くはない費用を負担してまで、熱心になる保護者は、どちらか片親だけが熱心であるだけでは不十分で、夫婦間の理解と協力がなくては成立しえないものであることがわかる。

5 エスニック文化継承とアフタースクール・プログラム

このように保護者の理解と熱心な教育投資の結果、子どもたちが覚えた日本語のメンテナンスは、英語環境が多くなる卒園後難しくなる。そこで、フォロー・アップのクラスが卒園児に限って4時から5時半の1時間半、アフター・スクール・プログラムが開設されている。週3回あり、週1回通う子どもから3回すべて通う子どもまでいる。その内容は、勉強の要素プラス遊びのゲームを取り入れた会話をメインにしたプログラムで、2004年時点で、延べ人数15人から20人の卒園児がプログラムに通っている。1999年に保育園を開設してからの子どもたちが対象となっているわけであるが、小学校3、4年生でもプログラムに参加している。20人のうち、7割はどちらかが日本人、どちらかがカナディアンの国際結婚カップルの子どもたちで、25%ぐらいが家庭では日本語を話さない環境の子どもたちで、カナダへ移住してきた両親ともに日本

人である家庭の子どもは5%ぐらいであるという。両親が日本人である場合、このような移住者カップルよりも駐在員の家庭であることが多いが卒園すると日本に帰国する場合が多く、アフター・スクール・プログラムに継続して参加する駐在員の子どもは、現在のと

ころ1人もいないそうである。

池端さんは、子どもたちが高学年ぐらいになるまでは、この日本でいう学童保育のような日本語のメンテナンス・プログラムを続けたいと抱負を語られた。

Ⅳ. ケース・スタディその2：池端ナーサリー・ディレクター鶴崎圭子さん

鶴崎圭子さんは、中学生（12歳）から父親の仕事の都合でカナダに居住している「帰らなかった帰国子女」である。父親は名古屋の大手陶器メーカーに勤務し、結果的に鶴崎さんが結婚するまで12年間カナダに駐在し、家庭の中では必ず日本語を使うことがルールであった。土曜日は毎週日本語補習校に通った。12年の間、日本への帰国は、3年に1回あるいは5年に1回程度で、2～3週間旅行程度の帰国であったという。鶴崎さんはカナダのカレッジで保育科を修了すると、専門を活かして Jr. YMCA という保育園で保育士の仕事をカナダで続け、そこを退職し、池端ナーサリーでディレクターとして現在活躍している。鶴崎さんは国際結婚ではなく、ワーキング・ホリディでカナダに来ていた日本人男性（当時24歳）と結婚した。2人の子ども（長女小学4年生、長男小学2年生）は、カナダ生まれカナダ育ちである。

1 池端ナーサリーに勤務するようになった経緯

鶴崎さんは当時勤務していた Jr. YMCA に一緒に長女を連れて行っていた。ところが、長女が最初に覚えた歌が英語であったことにショックを受け「このままカナダの中で英語

しかしゃべれない子になってしまうと思って焦り」を覚えたという。長男の出産をきっかけに、家にいて子どもたちに日本語を教えあげようと休業しているときに、池端さんから「是非うちで一緒にやらない」かとナーサリーを開園する話を持ちかけられ、子どもの日本語教育と自分の専門を生かせる職場ということでまさに一石二鳥、しかも絶妙なタイミングであったということが、鶴崎さんが池端ナーサリー開園にも携わることになったきっかけであった。

2 海外経験の長さと働く母親としての言語教育

25年間日本を離れて暮らすことによって日本のよさを知った鶴崎さんは、日本のことを子どもにも教えていきたいと希望する。2人の子どもは日本語補習校の図書館から毎週10冊ずつ本を借りてきて、毎日1冊以上本を読むようにしているという。小学校2年生の長男は、4月から新学期が始まって冬休みまでに160冊読み、補習校で表彰された。カナダ生まれカナダ育ちで、家庭で英語を話す子どもと比べたら、日本語が強く英語が劣っていたため、グレード1（カナダの小学校1年生）では1年間 ESL（English as Second

Language：英語が母語ではない人のためのクラス)に入っていた。

しかし、鶴崎さん自身、英語が全くわからなかった12歳からカナダで過ごし、カレッジを修了し、カナダで仕事をしてきているという自らの経験から、「大丈夫、絶対英語しゃべれるようになるんだからっ」と子どもたちにも話し、家では日本語という原則を崩さなかった。

長女は小学校の最初の2年間はESLに毎日1時間ずつ入っていたが、4年生の2004年12月現在、英語は問題なく、また授業科目にフランス語が加わってもAやBという好成绩であるという。また、早生まれであることから、補習校で先に算数を学習し、現地校では後から習うことから、クラスで1番にできるという好循環を生み出している。

日本語の補習校の宿題は学年があがるごとに増え、土曜日の補習校の宿題を金曜日にすることが多いことから子どもたちにとっては「魔の金曜日」となり、補習校以外に、アイス・ホッケーやサッカーなど課外活動をするようになる高学年になると、補習校へいくのが辛くなるという傾向がある。ましてや、母親が鶴崎さんのようにフルタイムで働いていると平日なかなか子どもの宿題にまで目が届きにくくなる。その点、鶴崎さんは、日曜日の午前中から宿題が多いときは午後までずれこむこともあるそうだが、日曜日のうちに補習校の宿題を終わらせ、平日は現地校の宿題と習い事をするというルーティーンを作っている。

夫が子どもの教育に関して協力的かどうかをたずねると、「言葉、教育に関してはもう任したからってという意味では協力的」である

という。ご自身が日本の中学・高校を卒業していないので、補習校の宿題で歴史や地理は、「あ、ごめん、わかんない。じゃ、パパに聞いて」と上手く日本生まれの日本人である夫に任せるところは任せている。

近い将来、ご自身の子どもたちが補習校へ行くのを嫌がるようになって「お母さんだっがんばったんだから、あんたたちががんばりなさいよ！って、それでもう通そうと思っている」ということだ。補習校へ親自身が通っていたという経験があると、ないとでは子どもへの説得力は異なると思われる。

先生として、国際結婚カップルの子どもの日本語の継承についてどのように見ておられるかを質問した。日本人女性が母親の場合、日本語をそのまま継続して話すことができる子どもが多いが、その逆のパターン、つまり日本人男性が父親で英語が母語の母親の場合、日本語を忘れてしまうことが多いという。池端家は非常に上手くいっている例であるが、日本語の継承には「みんな苦勞されています」ということである。ナーサリーに通う園児たちにおいては年齢が6歳までという低年齢だけに日本語の継承は順調であるが、卒園してから3年後、5年後がポイントになってくるであろうと予測している。

3 子どもの国籍選択について

鶴崎さんの子どもは両親が日本人のため日本国籍にも入っているが、カナダ生まれのため市民権もある。子どもたちは日本国籍を捨てることはないのではないかとというのが母親としての意見であった。「子どもたちが日本に住みたいって言えば」道が開けるように、アメリカの大学に行きたいといえば、「一緒

にアメリカへ行こうかな」と考えるほど、カナダとか日本とかにこだわっているわけではないという。そのためにも日本語と英語両方

ができるようにしておきたいという気持ちが強い。

V. 若干の考察

池端さんをご自宅にデイケアセンターを開設したのが1993年、日系文化会館に現在のよう池端ナーサリーを開設したのが1999年である。入園者の保護者が日本人駐在員から国際結婚カップルの子どもたち、特に日本人女性の国際結婚が90年代に増えたという。そこで海外における国際結婚を統計で確認しておきたい。

日本における国際結婚は、日本人男性のほうがアジア諸国の女性と国際結婚するほうが多い。2003年の厚生労働省の『人口動態統計』によると、日本人男性の国際結婚は27,957件、日本人女性の国際結婚7,922件であり、件数にして3.5倍も日本人男性のほうがより国際結婚しているのである。

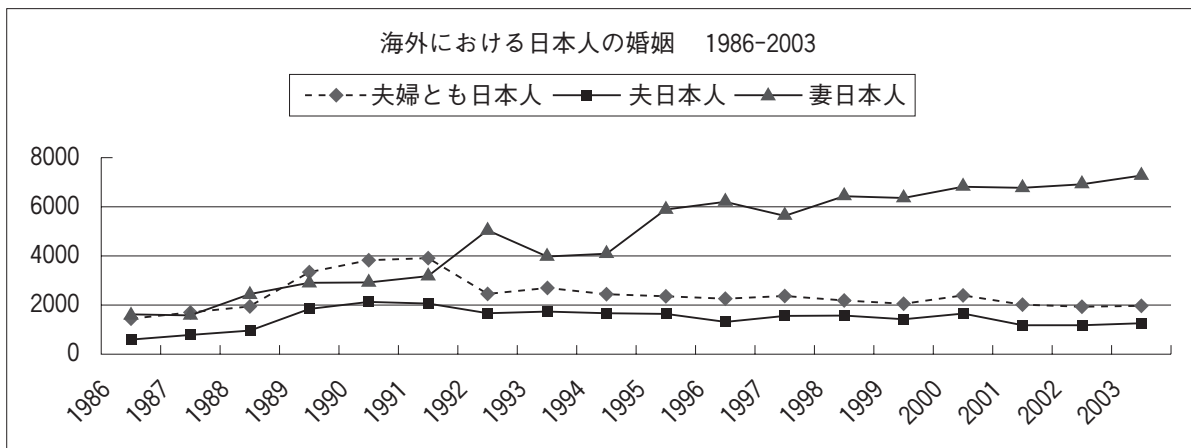
しかし、海外における日本人の国際結婚は、東京にある厚生労働省大臣官房統計情報部企

画課普及相談室に直接閲覧しに行かなくてはならない。厚生労働省に保管されている保管表をもとにグラフにしたものが図1である。

図1「海外における日本人の婚姻1986-2003」から海外における日本人の婚姻を100%とすると、2003年では日本人女性の国際結婚が69.9%と7割弱を占め、夫婦ともに日本人の場合が18.7%、日本人男性の国際結婚が11.4%となっている。

特に、バブル経済が崩壊した1991年以降、海外における日本人の結婚は、日本人女性の国際結婚が最も多く、ついで夫婦とも日本人である場合であり、日本国内ではバブル経済以降急増した日本人男性の国際結婚は、海外ではさほど急増していないことがわかる。1986年では1620件であった海外における日本人女性の国際結婚は、バブル期の増加傾向よ

図1



厚生労働省 『人口動態統計』保管表より嘉本作成

りもむしろバブル崩壊後の増加傾向のほうが顕著であり、2003年では7,313件と4.5倍増加している。一方、日本人男性の国際結婚は、561件（1986年）から1,191件と2倍の増加に留まっている。2,104件と最も多かった1990年以降は減少しており、ピーク時のおよそ半数でしかない。また、同様に日本人どうしの海外における婚姻も1991年の3,932件をピークに減少傾向にある。

カナダでの国際結婚増加の要因は、インタビュー中にも何度か言及されたワーキング・ホリデー制度の利用にあると考えられる。池端さんの観察によるとカナダのトロントでは1990年代から国際結婚が増加し、ワーキング・ホリデーでカナダに来た日本人女性がカナディアンの男性と結婚するパターンが多いという。また、鶴崎さんの配偶者もワーキング・ホリデーでカナダにきた日本人男性であった。また、池端ナーサリーでパート・タイムで保育士の仕事をしておられる日本人女性Kさんも、日本人男性の配偶者とともに、

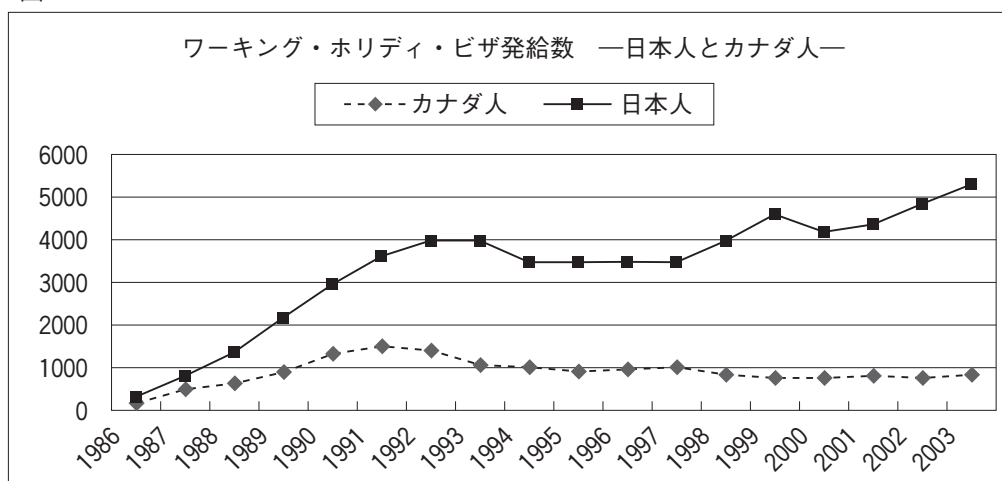
つまり、夫婦でワーキング・ホリデー・ビザによりカナダにきて、移民申請を行なっていた。

社団法人日本ワーキング・ホリデーのホーム・ページ⁷⁾によると、その目的は以下のように記されている：

ワーキング・ホリデー制度は、二国間の協定に基づいて、最長1年間異なった文化の中で休暇を楽しみながら、その間の滞在資金を補うために付随的に就労することを認める特別な制度です。本制度は、両国の青少年を長期にわたって相互に受け入れることによって広い国際的視野をもった青少年を育成し、ひいては両国間の相互理解、友好関係を促進することを目的としています。

対象は、日本国籍の日本に在住している18歳から30歳までの人（一部の国は18歳から25歳まで）であり、オーストラリア（1980年12

図2



<http://www.jawhm.or.jp/jp/prgrm/visa> PDFをもとに嘉本作成

7) <http://www.jawhm.or.jp/jp/index.html> 2005年9月29日閲覧

月1日開始)を皮切りに、ニュージーランド(1985年7月1日開始)、カナダ(1986年3月1日開始)、韓国(1999年4月1日開始)、フランス(1999年12月1日開始)、ドイツ(2000年12月1日開始)、イギリス(2001年4月16日開始)と7カ国との間で協定が結ばれている。

図2「ワーキング・ホリデー・ビザ発給数—日本人とカナダ人」はワーキング・ホリデー・ビザについて1986年から2003年までの日本人への発給数とカナダ人への発給数を比較してみた。明らかに日本人の発給数のほうが多く、カナダ人が受けたビザが最も多い年で1991年の1521人であり、2000年代は800前後である。一方、日本人の場合、1986年以降バブル期は上昇し続け、バブル崩壊後1997年までは停滞するが、1998年以降再び上昇し、2003年では、5,315件と過去最高を記録している。2003年で比較するならば、カナダ人よりも7倍多くの日本人がカナダでワーキング・ホリデーを体験していることになる。

1990年にはすでに3000件近く発給されており、残念ながらその内訳の男女比はわからないが、圧倒的に女性が多いのではないかと推測される。また、バブル崩壊後、終身雇用制度がゆらぎはじめ、派遣社員や契約社員の増加、あるいはフリーターの増加が90年代から増加することを考えると、男性もある程度、ワーキング・ホリデーを利用しているのではないかと考えられる。

日本人女性の海外での婚姻は、相手が外国人であれ、日本人であれ9割近くを占める。このことは何を意味するのであろうか。少子化が強い日本では、日本人女性は出産していない。一方海外での定住の傾向を伴う国際結

婚の場合、特に日本人女性は海外で子どもを産み、海外で暮らす傾向にある。つまり、日本人女性の海外流出は、ますます日本国内の少子化傾向を強めているということになるのではないか。日本人女性の移民化がもたらすであろう結果を、政府は考えているのであろうか。

海外で生まれ育った子どもたちは将来、日本国籍を選択するかどうかをせまられる。子どもたちが選びたいような国に将来、日本がなるのであろうか？ 国籍選択は法律上22歳までである。つい20年ほど前まで、国際結婚をした日本人女性が、日本で子どもを生まうと、父系血統優先主義の国籍法を維持していた日本では子どもに日本国籍を継承させられなかった。国籍が選択制になってから20年、日本国籍は選ばれてきたのであろうか？ 残念ながらその統計データを示す資料はない。

鶴崎さんのように、自分の生まれ育った定位家族が日本人同士であって家庭内言語が日本語で全員が話せる環境の中で、海外の日本語補習校に通った経験がある場合、自らの生殖家族を形成した際、子どもの補習校へ通う動機付けは定位家族のうちに経験をしなかった日本人女性よりもはるかに強いものと考えられる。

また、そのような経験がなくても、自らの生殖家族が日本人配偶者を持ち、家庭内言語が完全に日本語にできる家庭に育つ子どもと、国際結婚のように、自らの生殖家族が非日本語圏の配偶者を持ち、非日本語圏の現地校に通う場合では、子どもが日本語補習校へ通う動機付けはやはり前者のほうが強いと考えられる。

もともと補習校とは、鶴崎さんの定位家族

のように日本人家庭の子どもたちに日本と同じ教育を施す目的で設立されている。しかし、近年、国際結婚家庭の子どもたちが増加し、本来の目的とは変化が生じている。このような子どもたちの増加に対して、文部科学省は海外の補習校への助成金を減らす方向にあるようだ。日本政府が戦後男女平等の憲法を制定したにもかかわらず、国際結婚をした日本人女性への差別をつい20数年まで国籍法に残していたことは前述の通りであるが、現在でも政府機関にはそのような「偏見」が存在することは、この政策からも明らかであろう。

一方で、池端さんや鶴崎さんのように現地での状況を打開すべく尽力し、池端ナーサリーを開設して活躍している。国際結婚をした池端さんのよきビジネス上のパートナーとして、また、頼もしい友人として池端ナーサリーの運営に携わっているのが、帰らなかった帰国子女である鶴崎さんであるという組み合わせは、「できる日本人女性」の海外流出の好例であるようにも思える。もちろん、海外へ移民するすべての日本人女性が積極的であるとは限らない。日本人夫とともに移民したKさんは、「英語がいまだに苦手」と謙遜しておられたが、保育士という経験と資格を生かしてパート・タイムという形態で働いている。つまり、彼女たちの動きは、とかく孤立しがちな海外での育児ネットワークをひろげ、引っ込み思案な日本人女性にも活動の場を提供していることにもなる。また、ベテラン保育士のTさんは、スリランカでお産をした経験を持つ。Tさんの夫がスリランカ人のエンジニアであるため世界各国を移動しながら子育てをしてきた。どの国でも自分自身を失わない芯の強さと明るさをあわせもつTさんの

存在も池端ナーサリーには大きいのではないかな。

鶴崎さんは、25年もカナダで過ごされているにもかかわらず、立ち振る舞いがとても日本的な身のこなしをされる。またこちらが恐縮するほど、はきはきと丁寧な、そして美しい日本語で応対される鶴崎さんの姿から、両親のしつけの仕方、教育方針が容易に想像された。1960年代から1980年代前半にかけて10年近く海外で過ごす帰国子女の中には、日本人よりも日本的なしつけの行き届いた学生がいるという印象をもっている。両親が高学歴で、大企業に勤める場合、その教育方針は「保守的」であることが多いように思う。ブルデューのいう日本の「文化資本」は海外において保たれているという逆説がなりたつかもしれない。果たして海外において維持される「文化資本」が、日本という国の、あるいは国籍の選択につながるであろうか。今後の研究の課題は、日本国家の課題でもあるのではないだろうか。

参考文献

和文献

嘉納もも (2003) 「多文化過程におけるエスニック文化の継承：カナダ・トロント市の5つのケースから」『多言語多文化研究』9、87-106頁

厚生労働省大臣官房統計情報部 (2004) 『人口動態統計』

Bourdieu, P. (1979) *La Distancion : Critique Sociale du Jugement*, (石井洋二訳『ディスタンクシオン—社会的判断力批判』1、2、1989年、1990年)

英文献

Gordon, Milton (1964) *Assimilation in American Life : the Role of Race, Religion, and National Origins*. New York : Oxford University Press (ISBN: 0195008960)

Hansen, Marcus Lee. 1990 (originally delivered in 1937) "The problem of the third generation immigrant." pp. 191-203 in *American Immigrants and Their*

Generations : Studies and Commentaries on the Hansen Thesis after Fifty Years, edited by Peter Kivisto and Dag Blanck. Urbana and Chicago : University of Illinois Press (ISBN : 0252016890)
Kobayashi, Audrey (1989) A Demographic Profile of

Japanese-Canadians, and Social Implications for the Future (Contract PCS-8-00374) Ottawa : Department of the Secretary of State.
Makabe, Tomoko (1998) The Canadian Sansei Toronto : University of Toronto Press (ISBN: 0802041795)